博士論文要旨

# 戦国期における地域権力の形成

## ―越後国長尾氏を中心に―

前嶋　　敏

本論文は、戦国期における地域権力が、各地域の事情に応じてどのように形成され、また領国内の配下諸将とどのような政治的関係を構築したのか、その権力の形成のありよう、また維持・変容（強化）について、十六世紀前半～中葉以降における越後国長尾氏を題材として、その実態を具体的に検討することを通じて明らかにするものである。

以下に本論文の構成および各章の要旨について記す。

【目次】

序章　本論文の課題と方法
第一部　十六世紀前半期越後における権力の動向
第一章　越後永正の内乱と長尾為景　―北信濃諸将との関わりを中心に―
第二章　長尾為景の越中出陣と守護・守護代
第三章　越後享禄・天文の乱と長尾氏・揚北衆
第四章　長尾晴景の権力形成　―伊達時宗丸入嗣問題を通して―
第五章　長尾景虎の権力形成と晴景
補論一　戦国期越後における竪切紙の文書発給について
―永正～天文期の長尾上杉氏を中心に―
第二部　十六世紀中葉以降における長尾氏と権力　―国内諸将との関係を軸に―
第六章　長尾景虎の権力と直江実綱
第七章　長尾景虎の権力と山吉氏
第八章　長尾景虎の国外出兵と揚北衆　―北信濃出陣を題材として―
補論二　戦国期越後の贈答における品目について
―長尾景虎（上杉謙信）期を中心に―
終章

【要旨】

**序章　本論文の課題と方法**

序章では、本論文の課題および方法を提示する。

一九八〇～九〇年代に矢田俊文氏が提示した戦国期の権力の流れ（今岡典和・川岡勉・矢

田俊文「戦国期研究の課題と展望」『日本史研究』二七八、一九八五年などを参照）を示した上で、以下の二点に注目する。

A 戦国期権力の変容に関して、十六世紀中葉に第二段階が設定されていること。十五世紀末から十六世紀中葉における地域の戦国期権力の転換期は、各地域の事情によってさまざまな変質の過程があり、この点に注視する必要がある。

B 第二段階以後の戦国期権力（戦国期守護）が権威を基本として国内の戦国領主などを統制・編成したとされること。十六世紀中葉以後において地域権力を担う者の出自と権威を求める方向性は一様ではない。それ以後に登場した地域権力による国内諸将の統制、政治的な関係構築については、諸将との関わりを具体的に見直す中で、公的権威がどのように関わるのか、あるいは関わらないのかを判断する必要がある。

そこで本論文では、戦国期における地域権力が、各地域の事情に応じてどのように形成され、また領国内の配下諸将とどのような政治的関係を構築したのかを明らかにするため、二つの視角を設定して検討を行うこととする。

1 室町幕府―守護体制の崩壊から地域権力の登場に至るまでの時間的なずれを意識しつつ、十六世紀前半期～中葉の地域権力の様相について通時代的に見通す。

2 十六世紀中葉頃に登場、あるいは変質した地域権力と国内諸将との政治的関係のありようについて、とくに国内諸将個々の動向を踏まえて明らかにする。

なお、戦国期の越後では、十五世紀以来守護上杉氏、守護代長尾氏の体制が続いており、守護―守護代の相互補完的権力がつくられており（矢田俊文『日本中世戦国期権力構造の研究』塙書房、一九九八年などを参照）、また十六世紀中葉に守護上杉氏が滅亡し、以後長尾氏が単独で権力を担うようになるものの、長尾景虎は守護とは異なる官途や職（権威）を獲得する。したがって、十六世紀前半期の権力の変容をたどり、またそれを踏まえて国内諸将との政治的関係について考える上では最適な題材のひとつと考え、越後の長尾氏（上杉氏）を主な検討の対象とする。

## 第一部　十六世紀前半期越後における権力の動向

第一部では十六世紀前半期における越後守護代長尾氏の権力移行、また形成の過程を具体的に確認することを通じて、当該期越後における守護上杉氏・守護代長尾氏の関係性を見直し、また戦国期権力としての長尾氏について考察する。

### 第一章　越後永正の内乱と長尾為景　―北信濃諸将との関わりを中心に―

越後における下剋上の画期とされる越後永正の内乱の過程を確認しつつ、この乱での守護上杉定実・守護代長尾為景と北信濃諸将との関わりとその変化について検討を加え、上杉氏・長尾氏の権力が段階的に北信濃諸将に及んでいったことなどを示す。

### 第二章　長尾為景の越中出陣と守護・守護代

守護が不在となって以後の越後国における守護代長尾為景の動向などについて、とくに越中侵攻とそれ以後を主な題材として検討する。そして、為景が畠山卜山の死後、越後守護との関係を見直し、上杉定実との関係を改善して越後国内における権力強化をはかっていったとみられることを指摘する。

**第三章　越後享禄・天文の乱と長尾氏・揚北衆**

従来、長尾為景がよって政治的・軍事的に劣勢状況に追い込まれたと考えられてきた越後享禄・天文の乱の経過について、守護上杉定実や揚北衆の動向を踏まえて再検討し、むしろ優位な状況で戦乱を収束させたとみられることなどを指摘する。

**第四章　長尾晴景の権力形成　―伊達時宗丸入嗣問題を通して―**

伊達稙宗の三男伊達時宗丸を上杉定実に入嗣させようとする動きとそれを発端とする争い（伊達時宗丸入嗣問題）を題材にして、守護上杉定実・守護代長尾為景およびその子晴景の関係、さらに長尾為景から晴景への家督譲渡の様相を明らかにする。

**第五章　長尾景虎の権力形成と晴景**

長尾晴景の権力の様相を確認した上で、晴景から弟景虎への権力の移行およびそれにともなう国内の様相、またその時点における上杉定実の立場などについて考察を加える。そして、長尾景虎が黒田秀忠との対立などを経て、越後守護上杉定実を背景に兄晴景から家督を譲渡させたこと、さらにその後の長尾政景との経緯などについて明らかにする。

**補論一　戦国期越後における竪切紙の文書発給について**
**―永正～天文期の長尾上杉氏を中心に―**

長尾為景ならびに景虎の発給文書を素材として、そこにおける竪切紙料紙の使用状況の変容、および古文書の上で「切紙」と表現され、簡易に使用された文書と竪切紙との関わりなどについて考察を加える。そして、為景の文書発給にみる料紙形状のありようは大永期頃を境に大きく変容していることなどを示す。

なお、第一部の検討により、これまで曖昧にされてきた十六世紀前半期の越後国長尾氏の家督の継承状況が明らかになった。十六世紀前半期における守護代長尾氏の家督継承は、いずれも前代と次代の対立の上に、前代の権力が否定される形でなされたものであり、このことは、他の戦国期権力においても多くみられる。すなわち越後守護代長尾氏もそうした権力移行事例の一つとして位置づけられる。

**第二部　十六世紀中葉以降における長尾氏と権力　―国内諸将との関係を軸に―**

第二部では、守護上杉氏滅亡以後の長尾氏当主景虎と越後国内諸将との政治的関係につ

いて、国内諸将個々の動向の分析を通じて把握し、越後守護上杉氏滅亡以後における権力の強化・変容などについて検討する。

**第六章　長尾景虎の権力と直江実綱**

直江実綱の動向を分析し、それを踏まえて長尾景虎と直江実綱の政治的関係について考察を加える。そこでは、直江実綱は長尾景虎が弾正少弼となって間もなく登用された人物で、同時期に実綱とともに景虎の重臣であった大熊朝秀や本庄実乃とは立場に異なる点があることなどを明らかにする。また実綱は景虎権力の体制において配下諸将の中心的な存在として位置づけられていたことなどを示す。

**第七章　長尾景虎の権力と山吉氏**

越後三条に拠点をもち、蒲原以北の代官的立場で活動したとされる山吉氏に関して、山吉政応・孫四郎と山吉豊守の動向を比較検討し、その立場や景虎との政治的関係の違いなどを明らかにする。山吉氏は天文二十一年に政応、永禄元年に孫四郎と当主が死去して以後同氏の活動が不明瞭になり、一方、豊守は永禄九年以後から景虎の重臣的な立場で活動するようになることなどを指摘する。

**第八章　長尾景虎の国外出兵と揚北衆　―北信濃出陣を題材として―**

長尾景虎と揚北衆の関係の変容について、北信濃をめぐる争いにおける出陣要請の観点から考察を加える。揚北衆が景虎の出陣要請に応じるようになるのは永禄元年からであるとした上で、その背景について、甲斐の武田晴信による越後侵攻という現実的な危機感が増していったことなどを示す。

**補論二　戦国期越後の贈答における品目について―長尾景虎（上杉謙信）期を中心に―**

長尾景虎の行った贈答の品目について検討する。永禄四年頃から馬や鷹などといった贈答品を受け取るようになるなどの変容がみられることを指摘した上で、その変容と景虎の社会的立場の上昇との相関を示す。

なお、長尾景虎の行政機構については、次第に低身の新参者が重用されるようになること、個人的な親疎をもとにした信頼関係が重視される傾向にあることなどが藤木久志氏などによって指摘されているが、第二部の検討を踏まえると、直江氏や山吉氏といった譜代直臣とされる人物においても、個人的な親疎をもとにした信頼関係の観点は注視されるといえる。

**終章**

終章では、全体のまとめ、本論文の成果と展望を示す。

成果として、大きくは以下の二点があげられる。

１　越後国を題材として、十六世紀初頭から中葉以後までの地域権力の様相を通時代的に明らかにしたこと。守護上杉氏および守護代長尾氏は、相互補完的権力を構成していたが、十六世紀前半～中葉の段階でその相互補完の体制、あるいは守護の権威はすでに揺らぎつつある段階にあり、ゆるやかに守護―守護代の体制から転換していく過程にあったとみられる。また、天文九年（一五四〇）における上杉定実への伊達時宗丸の入嗣交渉およびそれを契機とした争い（伊達時宗丸入嗣問題）を経て、入嗣が失敗したことが一つの画期をあらわすと評価される。

２　１の成果を受けて、十六世紀中葉に守護上杉氏の滅亡を受けて単独の権力を成立させた長尾氏が、国内の諸将とどのような政治的関係を構築していくのか、諸将個々の動向の観点から、景虎が得た公的権威との関わりを意識しつつ明らかにしたこと。長尾景虎は実質的な越後国主的な立場となるものの、越後守護となることはなく、また弾正少弼に叙任され、また関東管領に就任するなどしたが、これらの権威は、多くが上杉氏につながるものであり、国内諸将との関係構築において求められたことが想定される。景虎にとっての公的権威は、権力の正統性に関する理論的根拠として位置づけられる。また景虎による公的権威の獲得は、さまざまな方策をもって権力を強化していく過程のひとつとして位置づけられる。

以上本論文では、十六世紀前半から中葉以後にかけての、権力の形成・変容、また十六世紀中葉以後における諸将の行政機構への登用、また軍事動員等の様相について、越後国長尾氏をおもな題材として検討した。そして、十六世紀前半期における越後国の権力がゆるやかに守護の存在、またその意義を否定していく段階にあること、またその後の越後国における権力が、諸将に対する統制を強化しながら、公的な権威を支配の正当性の理論的根拠としていくことの見通しを示した。

このことを踏まえて、今後、とくに権力による諸将統制の実態に関して、他の武将などの事例も含めて考察を深めていきたい。